

緊急医療支援、世界で存在感

アジア、アフリカ、中南米に人脈を張り巡らし、今月初めにサイクロン被害が発生したミャンマーでも医療支援を被災地で始めた国際医療ボランティア組織AMDA(アムダ)。海外で存在感を増しているが、今も本部は岡山市に置き、地元岡山からの国際貢献に強いこだわりを持つ。理事長の菅波茂さんに聞いた。

菅波 茂さん



(すがなみ・しげる) 1946年(昭和21年)岡山県大分市生まれ。61歳。岡山大学医学部卒業。研究開発部長。国際医療ボランティア活動中。岡山大学国際医療ボランティア活動センター理事。岡山大学国際医療ボランティア活動センター理事。岡山大学国際医療ボランティア活動センター理事。

「弱者復活」岡山から発信

AMDAの活動の広がり。岡山市の本部のほか、二十九カ国に支部を持つ。例えばインドネシアは大学そのものがAMDAで、多くの医療スタッフが抱える。災害があれば『いざ鎌倉』で百人規模が被災地に集う。緊急救援はこれまで五十カ国で百件以上

実施した。自分の活動はもっぱら探検家精神から。医学を使ったから人道支援になった。地方都市の岡山から今後どう国際貢献していくか。「教育と福祉に関して感性が高いのが岡山の精神風土だ。例えば桃太郎にやっつけられ(大和政権による吉備地

方制圧が桃太郎説話のモチーフといわれる)、関ヶ原で敗れた西軍の主力、宇喜多秀家はこの本拠とした。弱者の気持ち分かるからこそ、阪神淡路大震災ではどこよりも救援に力を入れた」

「この感性を生かすのが人道支援だ。ただ、弱者を救済

地元にごだわり

〈記者の目〉取材の最中に菅波さんは、岡山の国際医療・福祉立真構想について、私の取材ノートに何度も説明図を書いてくれた。帰る時には事前に準備していたというA4三枚のレシ

ユメを渡してくれたほど。AMDAと言えば海外での活動の印象が強いが、地元・岡山への強い思い入れが感じられた。これまで活動を続けられたのは「狂気」と「俠気(きょうき)」のたまものだと菅波さんは語る。前者は常軌を逸するほどの意欲。そして後者は、その意欲を見て機会を与えてくれた人を大事にする心だ。地元にごだわり、真剣に将来像を考える姿勢には、AMDAをはぐくんだ岡山に恩返ししたいという「俠気」が表れているように思えた。(岡山支局 江口和利)

するだけではいつまでも弱者のまま。チャレンジスピリットに欠ける。だから新しいコンセプトを『弱者復活』とすべきだ。弱者がチャンスを得て、自己実現できるようにする(ことだ)」。具体的には。「岡山を弱者復活の都市として国際社会にメッセージを発する。岡山市中心部の街全体をバリアフリーにして、世界中から車いすの優秀な頭脳労働者を集める。居住空間、文化ゾーン、商業ゾーンを整備し、国際的な福祉支援施設や総合福祉研究所を作る」。東アジア中の人々の高度医療・福祉の需要に応える。AMDAは国連総合協議資格を持つ。国連の様々なプログラムを岡山に誘致し、世界銀行などの資金を引っ張ってこれる。人、モノ、金が集まり地域振興となる。岡山の街を次の世代へ引き継ぐ世界未来遺産とするのが理想だ」

